

庄司総一「月來香」論

——病院、産婆、〈1941〉の台湾——^①

リョウ シュウケン
廖 秀娟

一. はじめに

庄司総一「月來香」は1944年9月上旬から同年の11月下旬にかけて、台湾新報社刊行の雑誌『旬刊台新』において計9回にわたり連載され、本島人の女性、龍氏滋美と息子の梶井次郎を中心に描かれた小説である。17歳の時、台湾南部の梶井医院に女中としてつとめた滋美は、医師梶井永吉の子を身ごもった故に、里に追い払われ、さらに誕生したばかりの我が子までも引き取られてしまう。無学文盲だった滋美は奪われた子を偲びながら、幼稚園の先生を経て、やがて「台北医院」の産婦人科で看護婦の資格を取得し、産婆として生計を立てることになる。

一方、中学生になった時、梶井次郎は実の母が本島人であることを知ってしまうのだが、感情的にその事実を受け入れることができない。しかし長年念願した海軍兵学校の試験に失敗したことがきっかけで、自分の中に「立身、出世、打算、功利の俗念」が潜んでいたことに気づく。そして、甲種飛行予科練習生に採用された次郎は、訓練が終わって帰郷した際に滋美を訪ね、はじめて彼女を「お母さん」と呼びかける。作品の末尾で、大東亜戦争勃発後、マレー沖海戦で次郎が戦死した知らせを受けた滋美は、「海の荒鷲の母」「永遠の母」として誇らしく逞しく生きぬくことを決心する。

庄司総一は、連載が始まる前の8月号に載せた「作者の言葉」で、「今や日本は大いなる国難に遭遇し、一億国民は鬪魂をみなぎらせて仇敵撃滅を期してゐる。だが、勝利への道には大東亜民族の親和総力、いはば血の総合が必要

だ」と作品への自負を述べている。そこには、彼の戦争への眼差しが伺える。本稿は、作中に頻繁に出てくる医院、産婆、輸血などの医療関連をめぐる描写に焦点を当てながら、従来軍国的母親像に遠ざかれる本島人女性が「永遠の母」として描けた〈1941〉の台湾を主人公龍氏滋美を通して検討し、作品に新たな読みを試みるものである。

従来「『混血児』梶井次郎と母龍滋美を中心とした物語である^②」といった二本立ての捉え方で本作品を捉えてきたが、その最も大きな原因は、作者が連載小説の予告で書いた「この小説は内地人の子を生んだ一本島人女性の二十年に亙る苦闘史であると共に二つの血を半々に享けついで青年次郎が日蔭者である龍氏滋美を魂の中で真実母として浄化し、親子の愛を獲得せんとした悩み多い精神の発展を描いたものである^③」という紹介の辞と深く関わっていると考えられる。しかし、星名宏修氏が、「混血児」の角度からこの作品を検討し、「『混血児』の『悩み多い精神の発展』を表現しようと試みたこの小説は、(略)『他者』としての台湾人を描くことに成功しなかったのである^④」と指摘した。つまり、梶井次郎が「混血児」であることを知った当初は、ショックを受けたが、深刻な悩みには至っていなかったほか、「皇民化と優生学の言説が、『混血児』をめぐるせめぎあう血液の政治学は、次郎には無縁のものであった。さらに、植民者と被植民者の間で引き裂かれるアイデンティティの動揺も、彼にはさほど問題とならなかった^⑤」のである。確かに次郎には悩みはあったが、葛藤はなかったと言えよう。したがって、本稿は、星名氏の論を受け継ぐ形で、作品の中心は、「『混血児』梶井次郎と母親の龍滋美を中心とした物語」ではなく、むしろ、本島人女性龍滋美が〈軍国の母〉になるまでの道程にある。息子の梶井次郎はあくまでも龍滋美を検討する上での子としての梶井次郎だと考えたほうが妥当であろう。以下は、龍滋美を中心として、本島人の彼女が如何なる道を歩んで〈軍国の母〉—作中の言葉でいうと「海の荒鷲の母」になり得たかどうかを探ってみる。

二. 〈美談〉の成立—「護国の鬼」と「海の荒鷲の母」

本作品は第一回目の連載で無学文盲だった本島人龍滋美という片田舎の百姓の娘を描くことから始まり、最終回の末尾でマレー沖海戦で戦死し、「護国の鬼」になった息子次郎と同様に、自分も「永遠の母として、独り誇らしく、逞しく生き抜かねばならぬ」と励む彼女の姿を以って物語が閉じている。「無学の文盲」から「永遠の母」へと成長した龍滋美の姿からみれば、「月来香」を龍滋美の「サクセスストーリー^⑥」として読むことができる。更にいえば、日米開戦時にマレー沖海戦で名誉の戦死を遂げた次郎と、それを知ったにもかかわらず、涙を忍びながら職域奉公を堅持する龍滋美が、それぞれ「護国の鬼」と「海の荒鷲の母」へと昇華され、一つの〈美談〉に成り果てたともいえよう。

この龍滋美の献身的な姿並びに梶井次郎が参与したのが日米開戦の戦役だったことから、龍滋美が「軍神の母」に譬えられていることが容易に想起できよう。周知のように、1941年12月8日未明、日本がアメリカの真珠湾を奇襲攻撃し、正式に太平洋戦争に突入した。大本営が戦意昂揚と聖戦完遂を図るために、真珠湾攻撃で戦死した九人の「特別攻撃隊」の決死行為を讃え、彼らを「九軍神」として祭り上げて、その母を「軍神の母」として誉め讃えたのである。そして、これが契機で「軍神の母」が一つの時代ブームにもなった^⑦。矢澤美佐紀氏は「軍神の母」というコラムで「〈軍神の母〉とは、まさしく〈軍神〉を産み「お国のために立派に死ぬ」まで育て上げた後、気丈に「銃後を護る」母のことである^⑧」と述べ、「軍神の母」を定義している。

その後、昭和18年、「大東亜戦争緒戦の赫々たる勝利により大東亜光栄圏の基礎は確立したとは云え、戦局は長期戦の様相を呈しつつあった昭和十七年の夏、聖戦完遂の国民士気昂揚を計るために、この尊き無名の母を一道三府四十三県及び樺太全国津々浦々に尋ねて「日本の母」として顕彰する^⑨」という企画が読売新聞社により立てられ、『日本の母』という一冊の本が発行されたのである。岩淵宏子氏が、顕彰された四九名の「日本の母」を検討し、次のようにまとめている。

ほとんどが夫と死別（戦死、病死）あるいは離別後、女手一つで極貧の家を守り抜き、多くの子供たちを立派に養育した母親たちである。家は農家をもっとも多い。子供は、ほとんどが男子であり、国のために軍人として尽くす道を自ら選び、母はその夫や子供が戦死をしても、動揺せず心乱さず、祖国に忠誠を捧げられたことを誇りに思う。まさに、「勇氣・勤勉・堅忍・無私・慈愛」をもって「献身的精神の権化」となった「軍国の母」たちである¹⁰。（傍線は引用者、以下同様。）

作中で、無学だった龍滋美が勤勉で堅忍した精神で国語を学び、やがて産婆の試験を通り、免状をもらった。そして、息子次郎の未来を計り、一生息子と会わないことを奥様の梶井朔子と約束することになるのだが、そこから彼女の無私と慈愛に満ちた一面がうかがえる。無論、最も大事なものは、息子が戦死しても職域奉公を続ける龍滋美の献身的な行為であることは言を俟たなく、そんな彼女が戦時下に描いた「軍国の母」像に適うものだといえよう。

ところが、龍滋美が「軍国の母」として成し遂げるには、息子次郎の容認が必要である。それは、次郎の悩み、「自分が母親を二人持つてゐるつてことだ」に由来したからである。次郎には三人の母がいる。一人は生みの母龍滋美で、一人は次郎が生まれて一週間うちに滋美から奪い取った梶井永吉の奥様朔子で、最後は、朔子が亡くなって、次郎の継母になった直子である。しかし、梶井朔子が亡くなったとき、次郎はまだ幼く、朔子の母親としての記憶は薄いものであったということから、ここでの二人の母親とは、生みの母龍滋美と育ての母直子とする。それにしても、そもそも本島人の母を持ったことでショックを受けた次郎が、なぜ滋美を母として受け入れたのだろうか。

三. 近代化/皇民化の練成—国語、病院、産婆

作品の最終回で次郎が渡洋爆撃に出動する前に、龍滋美を「お母さん」と称して、彼女に遺髪の入った桐の小箱を渡したことから、次郎が龍滋美を母とし

て認めていたことが分かる。このような次郎の行動や容認によってはじめて、龍滋美が「海の荒鷺の母」と自認する自信を持ちえたのである。しかし、ここで注意を要するのは、次郎は最初から決してすんなりと受け入れなかったということである。

会ふ前に彼が心に描いてゐたのは、もつと年をとつた女だつた。まさか纏足してゐるとは考へなかつたが、とにかく大頭髻といふ台湾髻を結び、台湾服をき、さらに檳榔の実を噛んで歯を薄黒くしてゐるやうな女。……自分を生んだ女の想像は、初めから賤しい薄きたない感じで蔽はれてゐたのだ。/従つて、そのひとの喋る国語にたいしても期待が持てず、意志の疎通すら危ぶまれた。

（「月来香」第6回、傷める花、P32）

傍線部のように、次郎は本島人の母を想像していた。この次郎の本島人母像はとりもなおさず、当時、一般的に持たれていた本島人女性像と同じである。ところが、次郎の前に現れてきたのは、「ほとんど訛りが無いのみか、歯切れのいい快い言葉でさへあつた」、流暢な国語を話す滋美であつた。そして、「そのひとの容姿、態度、言葉使ひ、それら身につけた装ひと慣はしのために、次郎が錯覚に陥り、本島人だといふ意識からはみ出した」と言い、つい龍滋美が本島人であることを忘れてしまうのである。

更に、次郎の姉光子が「お産婆さんをして、いまとても流行つてるんだつてね。安達さんの話ぢゃ、字もろくろく書けない……（中略）無学な娘だつたさうだければ、いまは立派にやつてゐるんだもの、よつぽと苦勞して勉強したのね。えらいと思ふわ」と言い、実の母が本島人だつたことで落ち込んでいる次郎を慰めようと、龍滋美の美点を一々取り上げたのである。ここで、見逃せないのは、「お産婆さんをして、いまとても流行つてるんだつてね」という言葉である。姉の光子が真つ先に挙げたのは、産婆という仕事である。

無免許で経験も腕もひどい旧来の産婆—拾団婆—とは違い、正式の産科の訓

練を受け、試験を通った龍滋美の産婆という仕事は、病院によってイメージされる近代性と専門性を有しているものである。

そのみならず、1941年1月に「東亜共栄圏を建設して其の悠久にして健全なる発展を図る皇国の使命」を達成するため、「我国人口の急激にして且つ永続的なる発展増殖と其の素質の飛躍的なる向上とを図ると共に東亜に於ける指導力を確保する為」、また「高度国防国家における兵力及び労力の必要を確保する」ことで、「人口政策確立要綱」が決定された^⑪。当時、出産の奨励が計られるなかで、出産に第一線で携わる産婆は「草の根の先兵^⑫」としてみなされていた。当時の国策である「産めよ殖やせよ国のため」の遂行、「子宝報国」、「多産報国」が声高に賛美される時代の中、産婆が担った役割から考えると、当時の龍滋美の社会地位は極めて高いといえよう。

要するに、次郎は母が本島人だったことにショックを受けはしたものの、龍滋美が本島人でありながら、彼女の身なりや、流暢な国語、本島人臭くないことに加え、当時国策遂行の先兵ともいえる産婆という職業を有していたということから、激しい抵抗はみせなかったのである。無論、いうまでもなく、それは、龍滋美が近代化並びに皇民化を深化した本島人と深く関与したからである。

四. 輸血—生まれ変わる措置

星名宏修氏は台湾皇民化期の文学を論ずる際、「血液」の問題を取り上げ、「台湾人」にとって「日本人」との間に横たわる「血液」の「障壁」を超越することは、切実な課題であった^⑬と指摘した。確かに、台湾人は日本人になるために、いろいろな解決方法を考慮していた。例えば、周金波は、「志願兵」（『文藝台湾』1941.9）で戦争に志願し、「血を流す」ことを通して日本人になろうという方法を提示した。また、陳火泉は、「道」（『文藝台湾』1943.7）で結局敗北という結果に至ってしまったものの、国語を精神の血液とみなし、国語を持って純血主義者を退けようと試みた。

本作品で、「理性では、龍氏滋美を母と認めても、感情では、依然受け容れ

ることが出来ない」と思った次郎は、急性肺炎に罹った龍滋美に輸血したことで、その「障壁」を乗り越えたのである。「血をとつても、恐らくは助からないとすれば、むしろ、血を加へることのほうに、なんとなく人間的な情愛の深さを感じないではゐられなかつたのだ。それは科学の超越、論理の飛躍、といふものであり、そこから生れた、極めて稀れな現象を人は奇跡などといふのである」。

要するに、龍滋美が次郎の血を受けたおかげで、蘇生を成し遂げ、あたかも生まれ変わったようになった。「お互ひの血が音をたてて流れた。輸血をした、比較的近い過去から、生れた遙か遠い日の源へ、血は逆に流れていった」とあるように、次郎の血が逆戻ることにより、龍滋美は本島人のままではなく、内地人の血を引いて、頑なに立ちはだかった純血の「障壁」を乗り越えたのである。

更に言えば、「連載小説予告」で「勝利への道には大東亜民族の親和総力、いはば血の総和が必要だ。「アジアは一つ」と喝破した岡倉天心の言葉に「アジアの血は一つ」といふことに最後の解決を求めなければならぬと思ふ」という作者の言葉を念頭にいければ、内地人と本島人の血を同時に受け継いだ混血児の梶井次郎のみならず、本来「血の総和」が不可能だった本島人の龍滋美も「輸血」という処置を通して、「血の総和」「アジアの血は一つ」が成し遂げられ、それぞれ「護国の鬼」、「荒鷲の母」と化したことによって、聖戦を「勝利への道」に導くことを熱く期待する作者の思いがうかがえる。

五. 〈月来香〉—本島人の〈軍神の母〉

作品を追ってみると、無学文盲だった小娘から教養のある女性へと変わる龍滋美の成長ぶりがわかる。そして、婦長の「あなたは本島人だし、第一規則としては、年齢を超過してゐるのよ。でも、××先生の紹介だから、まあ入れたのだけれど」という産婆を希望している滋美に向けられる言葉からも分かるように、もともと本島人がなる資格のない産婆に、彼女がなったのである。最後

に、本島人には軍人になる資格が許されなかった当時、本島人の母は決して「軍神の母」にはなれなかったが、滋美が次郎の容認を得て本島人の「軍神の母」となったのである。この龍滋美の姿はまさしく皇民化が進むなかで「一視同仁」を最も代表できる模範だと言えよう。輸血を通して彼女の血を総和させた作者も恐らく聖戦を銃後で支える一翼を彼女に期待した。

ところが、聖戦を「勝利への道」へと導く模範のはずでもあった滋美は「世に知られず」、「認められず」、「慰められず」^{ママ}「軍神の母」であった。第一回目の連載冒頭で「人は永い一生の間には、それぞれ過ちや失敗を重ねるが、その都度、適当に償はれたり、よろしく忘れてりする。だが、なかには一度犯したが最後、どうにも拭ひきれず、生涯身に付纏ふやうな過ちや不運といふものもあるのである」というように、「龍氏滋美の不幸」が語られる。先走っていえば、要するに龍滋美が姦通の罪を犯した故、腹を痛めて生んだ我が子と一生「明るい太陽の下に出」て会うことができない罰が下されたからだと言語手が暗に示しているのである。

一方、「智慧の悲しみ、といふものだつた。物事を知るにつれ、過去において己れの犯した罪が、どのやうなものであつたかを厳しく意識するやうになつた」、「自分の罪にたいするせめてもの償ひだ」とあるように、滋美も自らの犯した罪を強く意識している。そのような罪を犯した龍滋美は作中に「日蔭者」として夜にしか香り濃く咲かない月来香に例えられたのである。

ところが、作中に書かれた月来香をめぐる描写や龍滋美の反応をつぶさに検討してみると、滋美が「明るい太陽の下に出」られない、「世に知られず」、「認められず」、「慰められず」^{ママ}「不幸」は、必ずしも彼女の罪に由来したわけではないのである。

飛行訓練を終えて四年ぶりに台湾に戻ってきた次郎が、滋美に会いに行った時に「お母さん、街へ出てみないか？」と誘った。「そりや駄目よ、次郎さん」と滋美が世間を憚って断ったが、次郎の熱い誘いで同意した。その時に、滋美はわざわざ和服に着替えたことを次のように考えた。

いま滋美がわざわざ和服に着換へたのは、世間の人の目をごまかさうといふ下心からではなく、海の荒鷲の母として、たとへ一日だけのことにしろ、初めて明るい太陽の下に出るには、キモノでなければ、自分自身ピッタリしない気がしたからだ。 (「月来香」完結篇、永遠の母、P31)

ここで、注意すべきなのは、滋美が和服に着替えた理由は世間の人の目をごまかすためではないと述べたところである。それを裏返して考えれば、和服に着替えたことによって隠せるのは、本島人であって、姦通という罪ではないのである。更にいえば、滋美が次郎の将来を心配する時に、「次郎が将来、お役人になるにも、軍人になるにも、隠れた本島人の母がある事実が分れば、立身出世の邪魔になる」と、姦通という罪を気にしているというよりは、むしろ自分が本島人出身であるという方を悩んでいるのだろう。これを確認した上で、再び月来香について考えてみる。月来香とは、「白百合の小さい花卉が沢山集つて出来たやうな花で、ほのかな香気を持つてゐる。本島の婦人は好んで香気の強い生きた花を頭髮に挿すが、これもその一つだつた」。夜しか花咲かない月来香が暗示するのは、罪で日に出られないというより、むしろ、本島人であることで太陽の下に出られないというほうが妥当であろう。

そこで、昼食の時間に飛行機に乗って、龍滋美の家を狙って一束の月来香を飛行機から龍滋美に投げた次郎の行動は、月来香は必ずしも夜にしか出られないものではないと暗に譬えているほか、その後、滋美を街へと誘ったことは、正に世に母が本島人だったことを告げるものである。これを見極めることによって、浮き彫りになったのは、龍滋美を「日蔭者」にさせたのは姦通を犯した罪ではなく、本島人出身であるということである。そこで再び作者の言葉を考えてみよう。

作者庄司総一が連載の予告で本島人龍滋美、ひいて彼女によって意味される大東亜民族の人々に聖戦に献身的な行動をとるよう大いに期待している一方、その彼らが帝国によって与えられるのは、「世に知られず」、「認められず」、

「慰められず」、虚ろの「一視同仁」でしかないのである。そして、この帝国の虚偽を赤裸々に露呈できるのは、正に志願兵制度がまだ実施されていない1941年でしかないであろう。

[注]

- ①本稿は、2010年度台湾行政院国家科学委员会研究計画による研究成果の一部である。(【文學、戰爭與國家—昭和十年代文學中的〈十二月八日〉—】計画番号：NSC99-2410-H-155-009-MY2)
- ②星名宏修「植民地の「混血児」—内台結婚の政治学」『台湾の「大東亜戦争」文学・メディア・文化』東京大学出版社、2002.12、P286。
- ③庄司総一「連載小説予告 作者の言葉」『旬刊台新』第1巻第4号、台湾新報社、1944.8、P19。
- ④前掲星名宏修論、P289。
- ⑤前掲星名宏修論、P288。
- ⑥前掲星名宏修論、P288。
- ⑦若桑みどり氏の指摘（「戦時下の母性政策」『戦争がつくる女性像』筑摩書房、2000.1、P79）によると、当時、軍神と軍神の母を題材にしたのは、前川康太郎『九軍神とその母』、清閑寺健『軍神を生んだ母』など軍神の母を讃える著作があった。1942年4月2日には、大日本婦人会が「ハワイ海戦特別攻撃隊将士とその母を讃える会」を開催したそうである。
- ⑧水澤美佐紀「軍神の母 栄誉と慟哭の挟間で」『女たちの戦争責任』東京堂出版、2004.9、P248。
- ⑨資料引用は入江曜子『日本が「神の国」だった時代』（岩波書店、2001.12、P158）に拠る。
- ⑩岩淵宏子「戦時下の母性幻想—総力戦体制の要」『女たちの戦争責任』東京堂出版、2004.9、P199。
- ⑪「人口政策確立要綱」（昭和16年1月22日閣議決定）「第一、趣旨 東亜共栄圏ヲ建設シテ其ノ悠久ニシテ健全ナル發展ヲ図ルハ皇国ノ使命ナリ、之ガ達成ノ為ニハ人口政策ヲ確立シテ我国人口ノ急激ニシテ且ツ永続的ナル發展増殖ト其ノ資質ノ飛躍的ナル向上トヲ図ルト共ニ東亜ニ於ケル指導力ヲ確保スル為其ノ配置ヲ適正ニスルコト特ニ喫緊ノ要務ナリ」。
- ⑫荻野美穂「資源化される身体：戦前・戦中・戦後の人口政策をめぐって」『学術の動向』、13巻4号、2008.4、P23。「当時出産はほとんどが医師ではなく助産婦の介助で行われたので、助産婦の資質向上と母子の生命を守ることが、「国家的使命」として強調された。(略)このように戦時下には産児報国のための草の根の先兵として働いた助産婦や保健婦は、戦後には一転して、受胎調節・家庭計画の伝道者としての役割を担われることになる。」
- ⑬星名宏修「『血液』の政治学—台湾「皇民化期文学」を読む」『日本東洋文化論集』7号、2001.3、P41。

参考文献

中国語資料

周婉窈「美與死—日本領臺末期的戦争語言」『海行兮の年代—日本殖民統治末期臺灣史論集』允晨文化出版、2003.2、P185-P213。

林慧君「第四章殖民統治與台灣女性形象」『日據時期在台日人小説重要主題研究』淡江大學中國文學系博士論文、2009.6、P103-P106。

日本語資料

入江曜子「第六章 母こそ命の泉」『日本が「神の国」だった時代』岩波書店、2001.12、P147-P168。

岩淵宏子「戦時下の母性幻想—総力戦体制の要」『女たちの戦争責任』東京堂出版、2004.9、P194-P205。

北村恒信「予科練」『戦時用語の基礎知識』光人社、2002.9、P140-P142。

木村涼子『〈主婦〉の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館、2010.9。

星名宏修「『血液』の政治学—台湾「皇民化期文学」を読む」『日本東洋文化論集』7号、2001.3、P5-P54。

星名宏修「植民地の「混血児」—内台結婚の政治学」『台湾の「大東亜戦争」文学・メディア・文化』東京大学出版社、2002.12、P267-P294。

矢澤美佐紀「軍神の母 栄誉と慟哭の扶間で」『女たちの戦争責任』東京堂出版、2004.9、P248。

若桑みどり『戦争がつくる女性像』筑摩書房、2000.1。

* 討議要旨

村尾誠一氏から、1941年の台湾において主人公が軍に日本人として志願することになる点をどう考えるかという質問があり、発表者は、本作品では内地人の父と本島人（台湾人）の母の混血児である主人公が、父に引き取られたがゆえに日本人として志願するが、この設定が翌1942年の日本軍への志願兵制度導入以降は見えにくくなる差別の問題を浮かび上がらせており、台湾人の母である滋美のように誰もが軍国の母になれると語りながら、実は正々堂々とはなれないことを暗示する作品となり得ていると答えた。村尾氏より更に、そうすると滋美が軍国の母になることには相当複雑な人間関係を読み取ることができ、単に当時の制度を賛美する小説ではないと評価できるのではないかとこの質問があり、発表者は、そう考えたいと述べた。続いて、司会者・戸松泉氏より、このテキストを取り上げたのは歴史的な表象としての再発見を意図したのか、それとも文学テキストとして評価できると考えるのかという質問があり、発表者は、本作品は文学テキストとして評価し得るもので、①植民地時代の小説の中で、台湾人を軍国の母と設定した作品が非常に少ないこと、②次郎と滋美の親子関係は世に明かすことができず、次郎がそれを世に知らせる方法として選んだ、飛行機の上から月来香の花ひと束を投げるシーンが非常にロマンチックで読者の心を動かすことに、特に意義を見いだせると応答した。